

ART FAIR TOKYO
MARCH 13-15 2026
TOKYO INTERNATIONAL FORUM

Press contact

ART FAIR TOKYO PRESS TEAM
press@atokyo.jp
<https://artfairtokyo.com/>

PRESS RELEASE



[DOWNLOAD PRESS IMAGE](#)

来場者は延べ56,938名、総取扱高は約36.5億円で前年から28.1%の伸びる

2005年の初開催から20回目を迎えた本フェアには141の出展者が参加し、3月13日から15日までの会期中、延べ56,938名の方にご来場頂きました。出展者のうち新規参加は10軒で、全体では現代美術75軒、近代美術25軒、古美術17軒、工芸13軒という構成となり、海外からは4軒が参加しました。加えて、石川県立輪島漆芸技術研修所をはじめとする、ギャラリーの枠に収まらない出展者7軒も加わり、日本に固有の表現的風土と、複雑な特性を有する市場構造を包括的に提示する機会となりました。

本年は、会場内外におけるプログラムをこれまで以上に強化するとともに、コレクターをはじめとするステークホルダーとの関係を深め、アートフェア東京が育んできた文脈をあらためて照射する機会となりました。またプレスパートナーとの協働も拡充し、昨年に引き続き日本経済新聞社とはタブロイド誌を制作したほか、本年から参加した『GQ JAPAN』を通じて、新たな層に向けてアートの世界をひらくことができました。チケットによる来場者数は前年から約27%増となり過去最高を記録しました。フェアの総取扱高は約36.5億円（前年比約28.1%増）に達し、日本の美術市場がその固有の特性に支えられながら堅調に推移していることを引き続き示しました。

堅調な姿勢を維持する国内市場

アートフェア東京の20回目のエディションにおいては、初日から活況な取引が目立ちましたが、特に角匠における葛飾北斎の名品、日動画廊の林武やベルナルド・ビュフェらの作品が取引されるなど、会場では複数のブースにまたがって上位価格帯の動きが見られたことは、市場の慎重な局面が指摘される今日のなかでも日本のギャラリーが確かな視座を持っていること、また国内の美術市場の底堅さを示すものと読み解くことができるでしょう。

TARO NASUでは、初日にローレンス・ウィナーの作品が国内外で注目される若いコレクターのコレクションに収まったことが印象的でした。同ギャラリーも「Weinerの作品を知らない若い世代にもedition作品を通じて新たなアクセスポイントを提示したいという希望にも添うもの」と振り返っており、さらに「セールスのみならず交流の場としてのArt Fair Tokyoのポテンシャル」を改めて感じたと述べています。柳ヶ瀬画廊では熊谷守一に注目が集まり、この他宝満堂による近代日本を代表する七宝家・濤川惣助の作品、YUMEKOBOU GALLERYの加藤巍山も非常に高い熱量をもって受け止められ、コンテナラリー以外の分野でも活況が見られました。柳ヶ瀬画廊は「例年は日本人とアジア圏の顧客様の購入が主でしたが、今年はヨーロッパ圏の新規顧客様が複数ございました」とコメントし、グローバル市場において相対的な底堅さを示している近代美術への関心が、日本においても着実に広がっていることをうかがわせました。



コレクターに新たな発見や出会いをもたらしてきた若手アーティストの展示も引き続き目立ち、前田紗希ら若手ペインターの作品を展示したMISA SHIN GALLERYは「今回のフェアはVIP・一般会期を通して来場者が多く、全体として非常に良い雰囲気でした。前田紗希の新たな展開を示す作品は特に好評で、嶋原夕佳の作品も持参分が完売しました。加えて、フランス真悟や伊庭靖子の作品も多く成約に至り、世代を超えて幅広い関心の高まりを実感しました」とコメントしています。さらにミドルクラスでもKANEGAEのブースで展示された彫刻家・前原冬樹らの作品もコレクターに好意的に受け入れられるなど、日本のアートシーンおよびマーケットの幅が広いだけでなく、その厚みのあることを示しました。

ギャラリーによる美術史への洞察は優れた展示として結実し、安田侃を紹介したシュウゴアーツは「安田侃作品は国内外の幅広い来場者より好評を得ており、国際フォーラム広場の「意心帰」とあわせてご覧になる方も多く、弊ブースの構成にも高い評価を頂きました」と述べ、またMEMのブースにおける大西茂、中里齊、ロバート・ウィルソンの展示は日本のマーケットに新しい相貌を与えるものでした。ギャラリー石榴は「20世紀美術として世界的に再評価が進むアンナ・ゼマンコヴァの出品に強い反応を頂いた。日本では認知度が高いとは言えない中、来場者の眼の成熟度と見識を実感するとともに、「新しい視点に触れたい」という貪欲さを感じた」とコメントし、これらは新しいコレクションの機会を提供するものであると同時に、日本の美術商の洞察力が一過的なものではないことを示しています。

海外からの出展がやや減少傾向にあることは事実であり、これはCOVID-19以降の金利環境や金融市場における流動性の変動を背景とした美術市場そのものの慎重さを反映していると考えられます。そうした今日の不確かな市場環境を踏まえると、アートフェアに求められるのは信頼性の高い売買環境の整備であり、したがって日本国内をはじめとするアジア諸地域の出展者およびコレクターにとって重要なフェアの機能を改めて整理し、その価値を維持・強化していくとともに、VIP層をはじめとする重要なステークホルダーとの関係を構造的にも安定したものと高めていくことがアートフェア東京にとってより実効的な方向性であると判断しつつ、N.Smith GalleryやPontone GALLERYといった海外から出展するギャラリーが求めるニーズをより深く掘り下げ、それに応えていける運営の余力を着実に高めていきたいと考えています。









東京 2020



Informational text and QR code on the left wall.

Informational text on the right wall.



会場外プログラムをパートナーと共に強化。「FILMS」を拡張して実施

20回目という節目を迎えるにあたり、アートフェアの機能と意義をあらためて捉え直すなかで、アートフェア東京は「アートフェアとは一つのメディアである」という認識に至りました。ここでいうメディアとは、作品の売買にとどまらず、現代のアートシーンにおける関心や潮流、価値観の断面を可視化し、来場者へ伝えるとともに、それらを古美術、近代、現代、工芸といった複数の時間軸のなかで捉え直す機能を指しています。そうした考えのもと、アートフェアの本義と相反せず、むしろそれを補完し拡張するプログラムを、パートナー企業と共に展開しました。

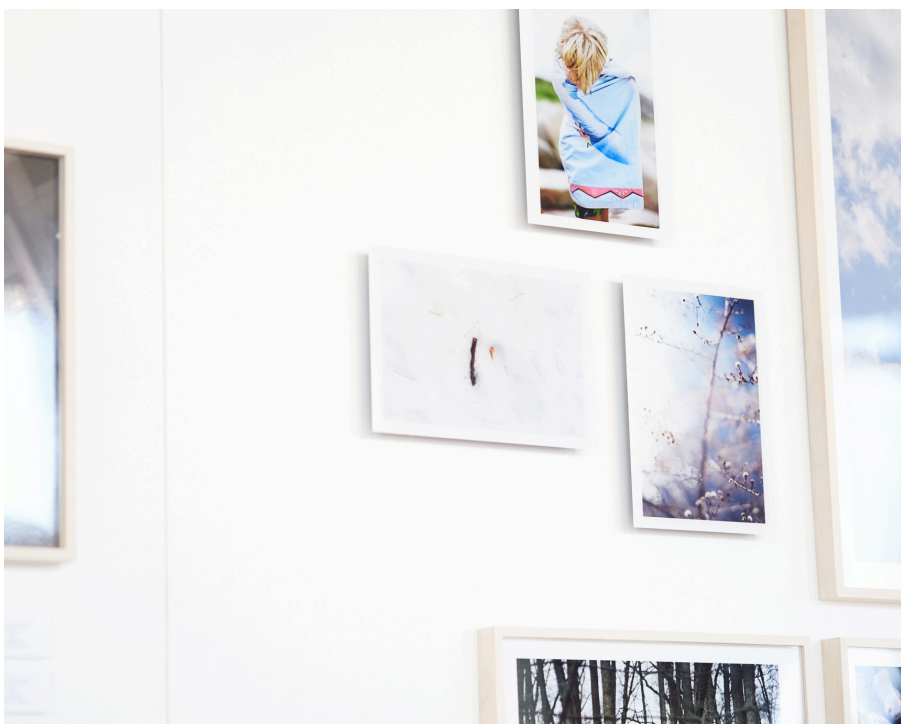
三井不動産株式会社とのパートナーシップは、本年のアートフェア東京において、そうしたプログラムを会場外へと展開し、その機能を都市のなかで実装していくうえで重要な役割を果たしました。東京ミッドタウン日比谷では映像プログラム「Films」を、東京ミッドタウン八重洲では株式会社アートチューンズの企画・運営による公式トークプログラム「Dialogue: ASK ART, WHY?」を実施し、異なる都市拠点を通じて、鑑賞、対話、思考の回路を立ち上げました。八重洲の会場となったイノベーションフィールドは、企業・アカデミア・スタートアップが交わる共創拠点として構想されており、そこで芸術をめぐる問いを流通させたこと自体が、アートフェア東京のプラットフォーム機能を外部へ接続する試みでもありました。



東京ミッドタウン日比谷では、昨年に新しく立ち上げた映像セクション「Films」を展開しましたが、これは表現手法としてはきわめて今日的でありながら、美術市場をはじめ、アートフェアにおいては限定的な接続しか与えられてこなかった領域に対し、その将来的なエコノミクスの土壌を耕していくことを企図したものでした。台北と東京を拠点に活動する non-syntax をプログラムディレクターとして迎え、「Art and Film? 言葉で定義できない映像の未来」と題し、オンサイト会場の作品上映をはじめ、国立映画アーカイブ主任研究員らと交えてのトークセッション、ジュリアン・ロスをはじめ海外のキュレーター等へのウェブサイト上でのインタビュー掲載という三つの回路を通じて、映像表現をいかに経験し、記憶し、継承していくかを多面的にひらく試みとなりました。

また同プログラムに付帯するかたちで、株式会社アマナの協力のもとで同会場に写真作品の展示も行い、映像プログラムそのものを補完し、その周辺にある視覚表現の広がりを会場内で経験可能にすることで、写真と映像の双方の鑑賞体験を深める契機を提供すると同時に、表現をより身近に捉えるための回路を形成することを目的としました。







トークプログラムについては、株式会社アートチューンズの企画・運営により、三井不動産株式会社の協力のもと東京ミッドタウン八重洲イノベーションフィールドにて、アートフェア東京公式トークプログラム「Dialogue: ASK ART, WHY?」を実施しました。2年ぶりの復活となった本プログラムは、「芸術に問う」を主題に、AI、スポーツ、法律、身体表現、デザインなど多様な領域の登壇者が集う全7つのセッションを通じて、芸術をめぐる問いを美術の内部に閉じず、より広い社会との接点から流通させる場として構成されました。山本浩貴、神楽岡久美、豊柴博義、岡部恭英、北島輝一、小松隼也、中山淳雄、ZEN、寺内俊博、磯谷博史、青沼優介、真鍋大度、超大衆超芸術らが登壇し、それぞれの専門領域を横断しながら、ひらかれたアートの条件、美的価値の判断主体、文化資本の継承、IPと創造の境界、身体表現の流通可能性、表現におけるヒエラルキー、AI時代におけるアーティストの役割など、現代社会に接続する複数の論点が提示されました。会場ホワイエでは神楽岡久美による展示も行われ、来場者が会場へ入る導入部から、美と審美眼をめぐる思考へと接続される構成がとられました。



各セッションはそれぞれ異なる角度から芸術を社会へと接続する試みであり、たとえば現代美術史家・文化研究者であり実践女子大学准教授の山本浩貴が参加した「開かれたアートとは何か—アートは誰を／何を排除してきたか」では、アートがより広い市民権を得ていく現在において、その内部にある構造そのものを問い直す必要性が論じられ、「アートが開かれる」とは何を意味するのかをあらためて検討し、日本サッカー協会エグゼクティブフェローの岡部恭英と、アートフェア東京CEOの北島輝一による「アートとサッカーに見る文化領域の戦略—文化資本を未来に渡すためのエコシステム」ではアートとスポーツを横断しながら才能を支え循環させる“オフザピッチ”の構造に注目が集まり、文化資本をいかに未来へ継承していくか、そのための戦略とエコシステムのあり方が対話されました。

神楽岡久美と豊柴博義が登壇したSession#2「AIの目と人間の審美眼—AI時代、美的価値を決めるのは誰なのか」、また小松隼也と中山淳雄が参加したSession#4「ファイナルファンタジーはアートに引用できるのか—アートとIPの権利の境界」では、AI時代における美的価値の判断主体、人間の審美眼の可能性、さらに引用・創造・権利の境界をめぐる論点が提示され、今日における芸術を取り巻く価値形成と制度的条件とが交差する場となりましたが、これらのセッションは、今日の社会環境のもとで芸術が置かれている制度や産業の条件を、異なる領域のステークホルダーが同じ場に集うことによって、ひとつの見取り図として立ち上げる試みでもありました。同時にそれは、アートフェアの本来の機能である作品売買の場に加え、芸術をめぐる問いや構造を可視化し、来場者へ伝えるメディアとして捉える本年のアートフェア東京のミッションを、会場外へとひらく実践でもありました。

動きは時を超えられるのか

流通する身体を巡って

2026.3.15

パルクールアーティスト アートアドバイザー
ZEN 寺内 俊博
Toshihiro Terauchi

17:10-18:00



toward
【フォーラムに向かって】
FORUM

toward
【フォーラムに向かって】
FORUM

toward
【フォーラムに向かって】
FORUM

TOKYO INTERNATIONAL FORUM
〒100-7301 東京都千代田区千代田 1-1-1

A vertical signpost with a rainbow-colored background, featuring the text 'toward FORUM' and logos for 'LIFE INTERNATIONAL FORUM' and 'TOKYO INTERNATIONAL FORUM'. The signpost is located in an urban setting with a modern building and a tree in the background.



TOKYO
INTERNATIONAL
FORUM

東京国際フォーラム

メインビジュアルに宮島達男を起用し、会場内プログラムを協働

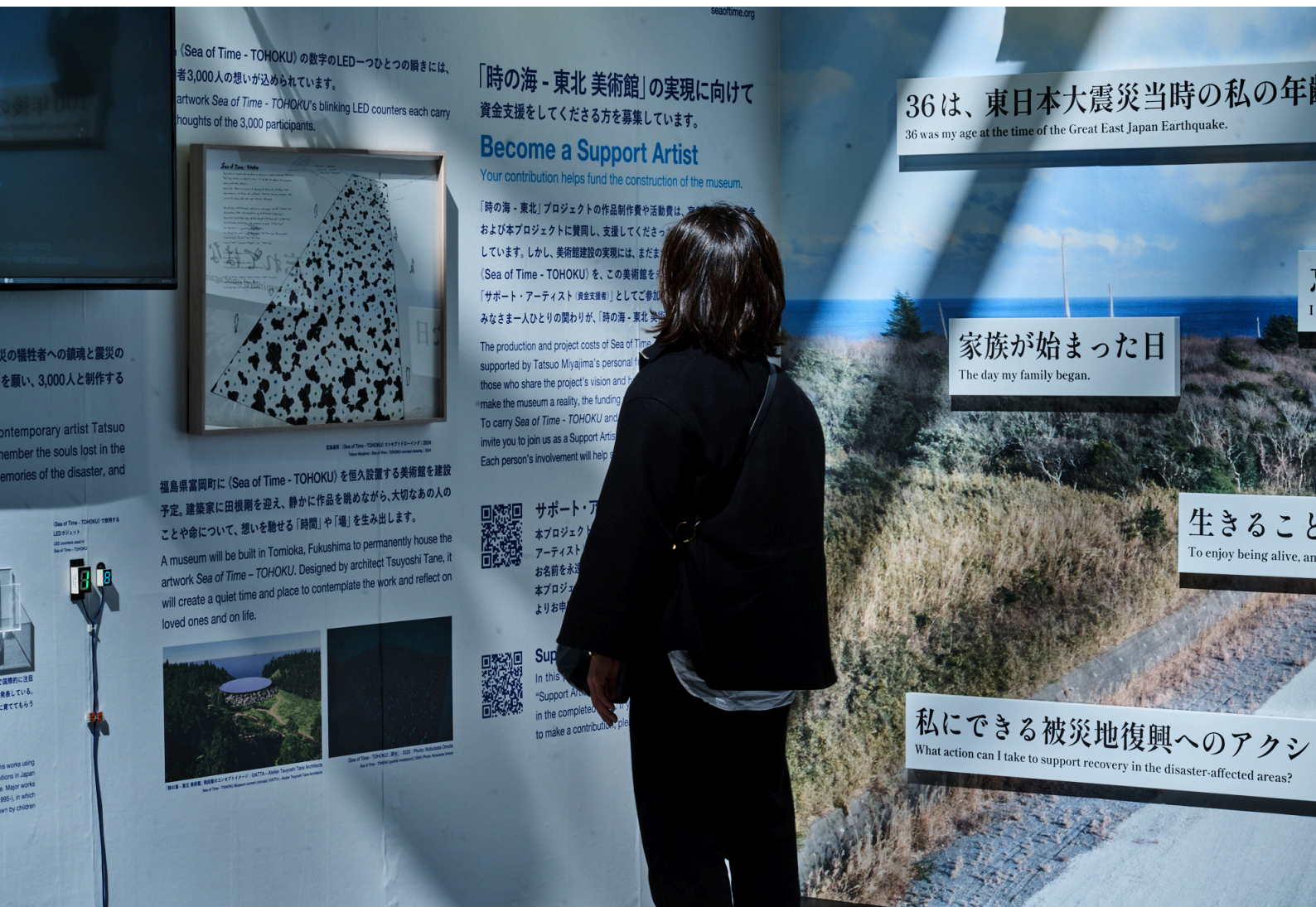
本年は、メインビジュアルに宮島達男を起用し、同氏が2007年に発表した *Counter Skin in Hiroshima-3 gold* をフェアの象徴として掲げました。時間や生命の連続性、他者との関係性を主題としてきた宮島の作品世界は、アートフェア東京が本年提示しようとした視点を象徴的に示すものとなりました。

会場内では同氏による展示をEncountersのセクションにて実施しました。Encountersは、主にギャラリーによる展示で構成されるアートフェア東京の会場内で1人のアーティストにフォーカスし、そのアーティストがどのように社会を捉え、どのように表現し、どのように評価されているかを感じ、考えるための場として位置づけられるセクションです。メインビジュアルと会場内展示を連動させることで、フェアの視覚的な導入と鑑賞体験とを接続し、来場者にとってより立体的な体験を形成しました。さらに特別仕様のフォントを用いることで、メインビジュアルの印象を会場体験の細部にまで浸透させたほか、パートナーとの協働の一環として、三井住友信託銀行によるパートナーブースでも同氏の作品を展示し、フェア本体の展示とパートナープログラムとのあいだに視覚的・思想的な連続性を生み出しました。

宮島達男氏も今回の展示について、次のように述べています。

「Art Fair Tokyo の4日間、『時の海 - 東北』プロジェクトの前に立ち続けることで、絶え間なく変化する『生』の響を肌で感じました。マーケットのダイナミズムの中、普遍的な生命の尊厳を分かち合う対話が生じたことは、私にとって大きな学びでした」

このように、本年の宮島達男の起用は、単に優れたアーティストをメインビジュアルに配したという以上に、フェア全体の導線や空間構成のなかでその作品世界を繰り返し受け取るための仕組みとして寄与しました。メインビジュアル、Encountersでの展示、パートナーブースでの展開を相互に接続することで、アートフェア東京は、来場者が作品を異なる文脈のなかで反復的に経験する場を立ち上げたと言えるでしょう。



Tatsuo Miyajima

Sea of Time - TOHOKU Project

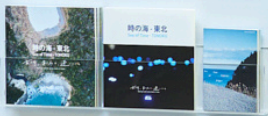
宮島達男 | 「時の海 - 東北」プロジェクト



プロジェクト紹介映像 (short edition) 4分55秒
Introduction video (short edition) 4 min 55 sec

「時の海 - 東北」プロジェクトは、東日本大震災の犠牲者への鎮魂と震災の記憶の継承、これからの未来を共にすることを願い、3,000人と制作するアートプロジェクトです。

Sea of Time - TOHOKU is a project by contemporary artist Tatsuo Miyajima, created with 3,000 people, to remember the souls lost in the Great East Japan Earthquake, pass down memories of the disaster, and shape Tohoku's future together.



宮島達男 現代美術家

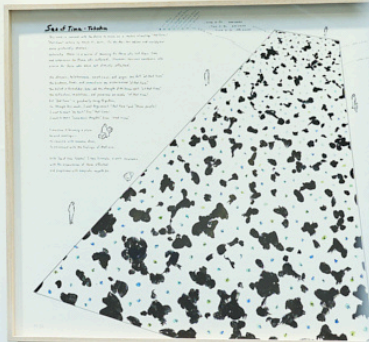
1958年 ウェストヴァー・ヒルズにて誕生。デジタル数字を用いた作品で国際的に注目を集める。以来、国内外で数多くの展覧会を開催し、累計30万回 250ヶ所以上で作品を発表している。代表作に「Mega Death」(1999/2016)など。緑屋した杉の木2本を世界の子どもたちに育ててもらった緑の誕生 - 杉の木プロジェクト (1995-)も推進している。

Tatsuo Miyajima Contemporary artist

In 1958, he was invited to the emerging artists section of the Venice Biennale, where his works using digital numbers drew international attention. Since then, he has held numerous exhibitions in Japan and abroad, presenting his work at more than 250 venues in 30 countries worldwide. Major works include Mega Death (1999/2016). He also leads the Revive Tomioka Kashi Tree Project (1995-), in which second-generation persimmon trees descended from an A-bombed kashi tree are grown by children around the world.

協力 - 一般財団法人福島復興文化財団
In cooperation with Fukushima Tomioka Art Foundation

作品「Sea of Time - TOHOKU」の数字のLED一つひとつが、参加者3,000人の想いが込められています。
The artwork Sea of Time - TOHOKU's blinking LED counts the thoughts of the 3,000 participants.



宮島達男 | 「Sea of Time - TOHOKU」の数字のLED一つひとつが、参加者3,000人の想いが込められています。

福島県富岡町に「Sea of Time - TOHOKU」を恒久設置する予定です。建築家に田根剛を迎え、静かに作品を眺めながら、大切なことや命について、想いを馳せる「時間」や「場」を生み出し、A museum will be built in Tomioka, Fukushima to permanently display the artwork Sea of Time - TOHOKU. Designed by architect Tsutomu Negami, it will create a quiet time and place to contemplate the work of loved ones and on life.



「時の海 - 東北」展示場、建築設計: 和田根剛 (Tomoko Negami), GATTA - Architects. Tomioka Sea of Time Museum (current concept) GATTA - Architects Tomioka Sea of Time Museum



「Sea of Time - TOHOKU」の数字のLED一つひとつが、参加者3,000人の想いが込められています。

ART FAIR



Tatsuo Miyajima "Counter Skin in Hiroshima 3 gold" 2007

VIPセクションとホスピタリティの強化の必要

本年のアートフェア東京における一般来場者は約27%増、VIP属性の来場者は約25%増となり、直近3年間はいずれも毎年20%前後の伸び率を示してきたなかで、本年は微増ながら最も高い結果となりました。これらはフェアにおける各分野の施策の成果であると同時に、アートフェア東京の会期中のホスピタリティを含めた体験価値の練度をさらに高めていく必要性を示唆するものとも捉えられます。

今年は、そうした会場体験の質を向上させることを目的に、株式会社ポーラの最高峰ブランド「B.A」をパートナーに迎え、「AFT Premium Lounge produced by POLA B.A」を実施しました。これは、B.Aが探求してきた研究と感性の蓄積を背景に、会場内に美しさを問い直すための体験の場を立ち上げる試みであり、VIPラウンジにとどまらず、一般アクセスエリアにおいてもB.Aによる特別な空間演出を展開することで、フェア全体の体験価値を拡張しました。とりわけ、「時間は、存在しない」というメッセージを表現した特別展示は、一般アクセスエリアにおいてもB.Aの思想を視覚的・空間的に受け取る契機となり、来場者がフェアの体験を美の感覚から再び組み立て直すための導入として機能しました。会場では、B.A第7世代のアートワーク「Timeless possibilities」を基軸とした空間構成を通じて、「自然現象」「植物の生命美」「人の営み」が重なり合うかたちで、B.Aが向き合ってきた生命美の感覚が提示されました。加えて、アルコールやソフトドリンク等の提供を含む歓談・商談のための環境も整備し、来場者にとって上質な休息と交流の場を形成しました。

今回のパートナーシップは、古美術から現代アートまでを横断して美の時間の流れや文脈を世界へ発信するアートフェア東京と、長年にわたり文化芸術支援にも取り組み、「Science. Art. Love.」の理念のもと、芸術が美のあり方を教えてくれるという考えを育んできたポーラとの、思想的な共鳴のもとに成立したものとと言えます。B.Aが掲げる「時間や年齢にとらわれず、人の可能性を広げたい」という価値観は、複数の時代や領域をまたいで美の文脈を提示してきたアートフェア東京の姿勢とも響き合い、ラウンジ空間を単なるサービス提供の場ではなく、フェアの思想を体験として受け取るための装置へと変換しました。

実際に、会期後のVIPアンケートからも「AFT Premium Lounge produced by POLA B.A」は上質な休息と交流のための場として好意的に受け止められていたことがうかがえました。B.Aの世界観に触れる体験とともに、会場内にもう一つの時間と感覚をひらくこの取り組みは、フェアにおけるホスピタリティの充実にとどまらず、アートフェア東京が目指す対話と接続のあり方に、体験の面から深度を加えるものとなったと言えるでしょう。

AFT Premium
Lounge

produced by POLA B.A





花が枯れることは 終わりを意味するのか
水は流れたあとに もどってこないのか
始まりから終わりへと向かう 時間という概念を疑え
わたしたちは 生まれつつけている
常識は 転換しつつけている
バイオアクティブ理論
あなたの中にある 果てしない可能性を見いだせ
限りない生命の力を信じたとき
そこに現れるのが きっと 新しい進化
時間は 存在しない
ただ あなたの無限の可能性が存在する

バイオアクティブ理論:人が本来持つ可能性を引き出す考え方のこと。



コレクターフォーカス - コレクターのための新セクションブースを創設

本年のアートフェア東京が取り組んだ新しい領域の一つに、コレクター活動の顕彰があります。「コレクターフォーカス」を一つの軸として掲げ、アートマーケットを支え、ひいてはアートの文脈そのものにも関わる重要なステークホルダーであるコレクターの活動をアートフェアの回路の中で可視化し、顕彰することを目的に、コレクターのためのブースを創設しました。

初回となる本年は、コレクター・大石氏による17年間にわたるコレクションを基盤に2021年に設立された「G foundation」が所蔵する榎倉康二《Figure No.45》を展示しました。日本の現代美術を中心に1,000点を超える作品を所蔵する同財団による本展示は、コレクターの営みが私的な蒐集にとどまらず、アートマーケットとアートシーンの双方に歴史的な視座をもたらすことを示すものであり、アートフェア東京が市場の現在だけでなく、その背後にある時間の厚みへ関わっていくうえでも重要な試みとなりました。

作品について

榎倉康二 | Koji Enokura
Figure No.45

1981

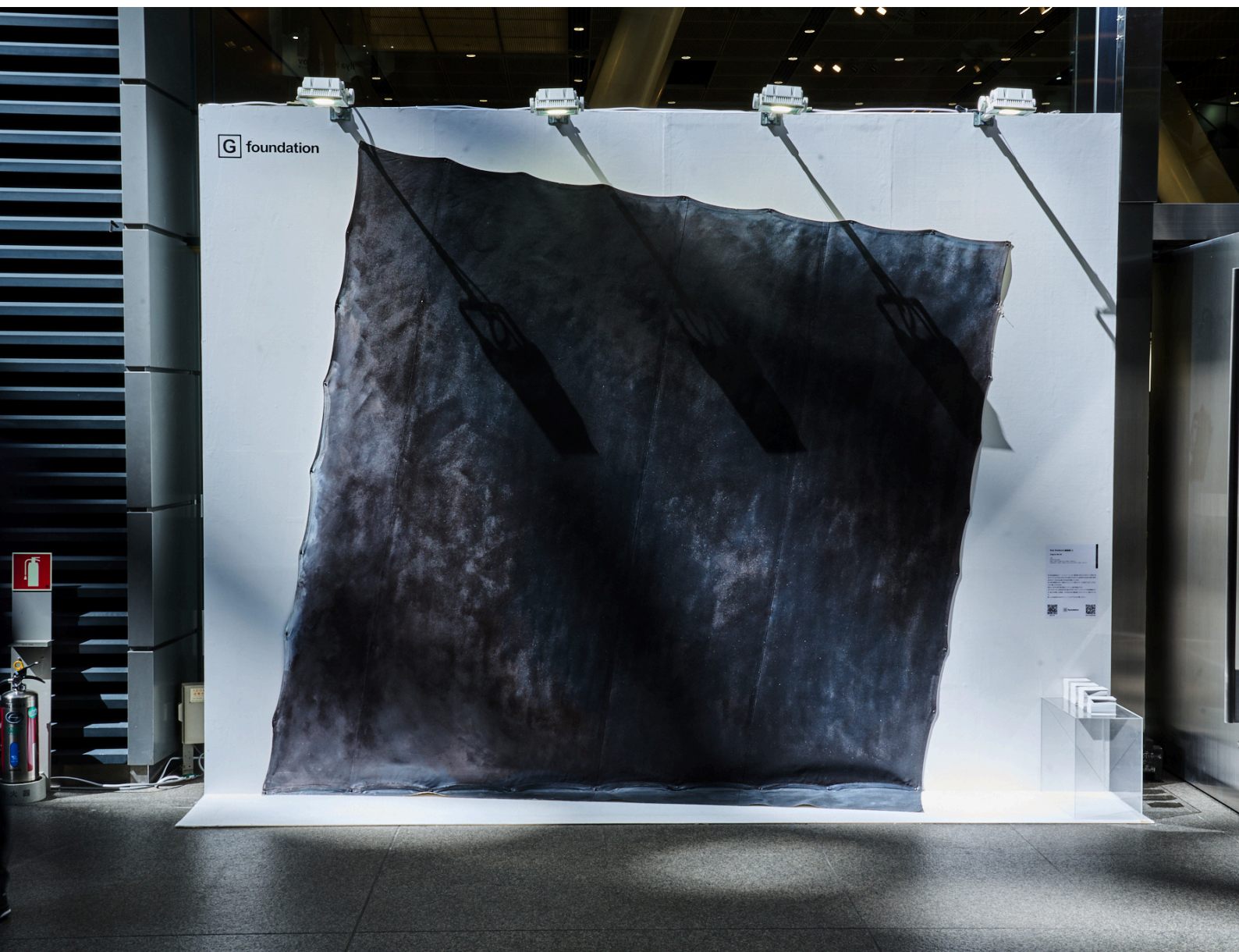
Acrylic on cotton

Work : 259.5 x 260.0 cm (102¼ x 102¾ in.)

Installation : 258.0 x 295.5 x 31.8 cm (101¼ x 116¾ x 12½ in.)

財団について

[G foundation オフィシャルサイト](#)





土地に固有の文脈を掘り下げてきたフェアの20年を捉え直す

会場内プログラムにおいても、アートフェア東京が20年にわたり育んできた、日本に固有の表現と市場の関係をあらためて捉え直す試みを展開しました。アートフェア東京はこれまで、現代美術にとどまらず、工芸や古美術を含む多様な領域を横断しながら、地域に固有の素材や技法に基づく表現を市場と接続して捉え、そうした結びつきが日本独自の市場性を形づくっていることを提示してきました。

我々が工芸を扱ってきたことの意義は、単にジャンルの幅を広げることにとどまらず、地域に固有の素材や技法に基づく表現を、市場との関係のなかで捉えてきた点にあります。アートフェア東京は、古美術、工芸、日本画、近代美術、現代美術までを含む幅広い構成を特徴としており、そのなかで工芸は、現代美術の外部に置かれるものではなく、日本の市場と表現の多層性をかたちづくる重要な領域として扱われてきました。

本年、石川県立輪島漆芸技術研修所や香川県漆芸研究所のような技術継承機関が参加したことは、そのことをいっそう明瞭に示しています。両機関はいずれも、地域に根差した漆芸技法の保存や後継者育成を担う制度的基盤であり、その参加は工芸が単なる作品カテゴリーではなく、継承、教育、生産の回路を含んだ文化的基盤として市場と接続されることを示すものでした。こうした出展は、単一の尺度では捉えきれない日本の表現の風土と市場構造を会場内に可視化するとともに、アートフェア東京が20年にわたり見つめてきた「工芸と市場の関係」を、あらためて現在形で提示するものでありました。



本年はそれらをさらに推進するかたちで、会場内プログラムとして日本陶磁協会による呈茶席および特別展示『EMBODIED - SOIL, FIRE, BODY』を実施しました。日本陶磁協会賞は、その時代において新たな表現を切り拓いてきた陶芸家を顕彰するプライズとして1954年（昭和29年）に創設されたもので、今回は歴代受賞者、また奨励賞受賞作家による作品が一堂に会しました。加えて、受賞作家の手がけた茶碗で抹茶を味わうことのできる呈茶席を通じて、陶芸を視覚的に鑑賞するだけでなく、素材・技法・身体感覚・鑑賞体験が分かちがたく結びついている日本の陶芸文化を、単なる展示にとどまらないかたちで経験可能にする試みでもありました。会期中には国立工芸館館長・唐澤昌宏氏によるトークイベントも行われ、陶芸を制度と歴史の両面から捉え直す機会が加わることで、展示、身体的経験、言説が相互に補完しあう構成となりました。

同時に、「MAJI ART PROJECT」を手がける間地悠輔による「カルチャー・イノベーション」の一環として、盆栽や陶芸などの地域固有の物質文化を、人類の創意と文化的展開のなかで捉え直す試みも展開されました。その一例として、盆栽作家・平尾成志による大型インスタレーション作品を展示し、土地に根ざした文化が同時に現代的な発明や更新の契機ともなりうることを示しました。



巡 環

水は流り、命は環るなる。

2011.10.14 - 2011.10.21

10:00 - 18:00

観覧料 大人 1,000円

小学生以下 500円

中学生以下 300円

小学生以下 100円

小学生以下 50円

小学生以下 20円

小学生以下 10円

小学生以下 5円

小学生以下 2円

小学生以下 1円

小学生以下 500円

小学生以下 300円

小学生以下 100円

小学生以下 50円

小学生以下 20円

小学生以下 10円

小学生以下 5円

小学生以下 2円

小学生以下 1円

開催概要

<開催概要 | アートフェア東京20>

会期：2026年3月13日(金) - 3月15日(日)

会場：東京国際フォーラム 展示ホールE/ロビーギャラリー

後援：外務省、文化庁、アメリカ大使館、ベルギー王国大使館、ブリティッシュ・カウンシル、チェコ共和国大使館、マレーシア大使館、スペイン大使館、シンガポール共和国大使館、イタリア大使館、アンスティチュ・フランセ、ブラジル大使館、北海道、群馬県、三重県、京都府、兵庫県、香川県、福岡県、石川県、富山市、金沢市、京都市、東京観光財団ほか

協賛：株式会社ポーラ、三井住友信託銀行

協力：東京建物株式会社、三井不動産株式会社、公益社団法人日本陶磁協会、G foundation、CoaLab株式会社、久世酒造店、Sato Wines Ltd.

リードメディアパートナー：日本経済新聞社、GQ Japan

メディアパートナー：J-WAVE、アートコレクターズ、目の眼、ARTnews JAPAN

<開催概要 | FILMS>

イベント名：映像プログラム「FILMS - Art and Film? 言葉で定義できない映像の未来」

会期：2026年3月12日(木)～3月19日(木)

会場：東京ミッドタウン日比谷

主催：aTOKYO株式会社

協力：三井不動産株式会社、株式会社アマナ（写真作品展示）

助成：アーツカウンシル東京【ライフウィズアート助成】

プログラムディレクター：non-syntax（台北／東京）

上映作家：葉山嶺/野村仁/新津保建秀/ジュン・グエン=ハツシバ/細倉真弓/山下麻衣+小林直人/平川祐樹米澤 柊/小沢剛/アナ・ヴァス/ジョナス・メカス

協力ギャラリー：アートコートギャラリー/ミヅマアートギャラリー/Takuro Someya Contemporary Art/STANDING PINE/SNOW Contemporary/MISA SHIN GALLERY/ときの忘れもの

トークセッション参加者：岡田秀則、金築浩史、庄野祐輔、西野慎二郎、和田信太郎、澤隆志（モデレーター）

ウェブインタビュー掲載対象者（一部）：木戸崇之、山下宏洋、門脇健路、シャイ・ヘレディア、ジュリアン・ロスほか

<開催概要 | ART FAIR TOKYO 20 オフィシャルトークプログラム「Dialogue: ASK ART, WHY?»>

イベント名：ART FAIR TOKYO 20 オフィシャルトークプログラム「Dialogue: ASK ART, WHY?»

日時：2026年3月15日（日）

会場：東京ミッドタウン八重洲イノベーションフィールド 4F 大会議室

主催：ART FAIR TOKYO／エートキョー株式会社

企画・運営：株式会社アートチューンズ

協力：三井不動産株式会社

登壇者：山本浩貴、神楽岡久美、豊柴博義、岡部恭英、北島輝一、小松隼也、中山淳雄、ZEN、寺内俊博、磯谷博史、青沼優介、真鍋大度、超大衆超芸術ら

Press contact

ART FAIR TOKYO PRESS TEAM

press@atokyo.jp

<https://artfairtokyo.com/>

ART

FAIR

MARCH 13-15 2026
TOKYO INTERNATIONAL FORUM

TOKYO

